

目次

はじめに.....	2
第1章 データから見る四紙のコラムの傾向.....	3
第1節 コラムのデータ.....	3
第2節 各紙別に見たコラムのデータ.....	4
(1) Cumhuriyet 紙.....	4
(2) Milliyet 紙.....	5
(3) Zaman 紙.....	5
(4) Türkiye 紙.....	5
第2章 論調から見るトルコのコラムの傾向.....	6
第1節 Cumhuriyet 紙 Hikmet Bila のコラム.....	6
第2節 Milliyet 紙 Fikret BİLA と Güneri Cıvaoğlu のコラム.....	8
第3節 Zaman 紙 A. Turan Alkan と Mümtaz'er Türköne のコラム.....	12
第4節 Türkiye 紙 Nuri Elibol のコラム.....	17
第5節 四紙の比較.....	20
第3章 トルコの新聞におけるコラム・コラムニストの役割.....	22
第1節 トルコのコラムニスト.....	22
第2節 コラムの持つ特徴.....	22
おわりに.....	24
参考サイト一覧.....	24

はじめに

トルコ共和国の総理府出版・刊行・情報局¹によると、現在トルコ国内では 31 紙、地方紙も合わせると 232 紙の新聞が発行されている（全国紙のうち、2 紙はスポーツ紙、3 紙は英字紙である）。全国紙 31 紙の中で、スポーツ紙と英字紙をのぞく 26 紙には毎日必ず 10 本程度のコラムが掲載されており、コラムニストが日々さまざまな分野についてのコラムを書いている。トルコの新聞において、コラム、そしてコラムニストはどのような役割を果たし、また読者にどのような影響を与えているのだろうか。

本稿では、全国紙のうち、左派の Cumhuriyet 紙、中道右派の Milliyet 紙、イスラム的右派の Zaman 紙、民族主義的右派の Türkiye 紙の四紙のインターネット版を扱い、2007 年 6 月 4 日から 6 月 10 日までの一週間に、四紙に掲載された全コラムをサンプルとして用いて、それぞれの新聞におけるコラムの数や用いられているテーマ、論調の違いなどを示しながら、トルコの新聞におけるコラム、またコラムニストの役割の一端を明らかにしていきたいと思う。まず第 1 章では、各紙のコラム全体の数や分野ごとのコラムの数を示しながら、データの上からわかる各紙のコラムの傾向を探っていく。第 2 章では、各紙のコラムの中身を詳しく見ていきながら、各紙の論調の違いを見ていきたい。第 3 章では、トルコの新聞において、コラムあるいはコラムニストとはどういったものなのか、そしてこれからどんな役割を担っていくべきなのかということを考える。

¹ トルコ総理府出版刊行情報局

<http://www.byegm.gov.tr/TURKBASINI/turkbasini/gazete.htm>

第1章 データから見る四紙のコラムの傾向

まず初めに、サンプルとしてとりあげた期間である 2007 年 6 月 4 日から 6 月 10 日の一週間に起こった主な出来事を整理しておきたい。

この週特に目立った出来事は、まず、当初 11 月の予定にされていたトルコ総選挙が前倒しで 7 月 22 日に行われることとなり、6 月 4 日にそれぞれの党の候補者リストが発表されたことである。総選挙に関しては、民主党と母国党の統合が失敗に終わったことも報じられた。またトルコ南東部の都市スィイルトやシュルナクで、クルド人武装組織 P K K の攻撃によりトルコ軍兵士の殉死者が出た。トルコ国軍のヤシャル・ブユクアスト参謀総長が、真夜中にインターネットの参謀本部のサイト上で、直接国民に向けてのメッセージを発表した。スポーツでは、ブラジル出身のサッカー選手ロベルト・カルロスがトルコのサッカーチーム、フェネルバフチェに移籍したことが報じられた。

第1節 コラムのデータ

まず、2007 年 6 月 4 日から 6 月 10 日の期間に、四紙各紙に 1 日にどれくらいの本数のコラムが掲載されているのかを以下の表で示す。

四紙に掲載された 1 日あたりのコラム数（2007 年 6 月 4 日～6 月 10 日）

	6/4	6/5	6/6	6/7	6/8	6/9	6/10	合計
Cumhuriyet	14	15	17	15	15	12	16	104
Milliyet	7	14	15	18	16	16	12	98
Zaman	14	10	12	10	7	10	9	72
Türkiye	17	19	22	20	16	17	19	130

4 紙合計 404 本

上の表からもわかるとおり、四紙とも 1 日に 10 本以上、Türkiye 紙に至っては多い日で 20 本以上ものコラムを掲載している。

また次に各紙のコラム計 400 本をジャンル別に分類した表を以下に示したい。なお、2007 年 7 月 22 日に行われるトルコ総選挙についての記事と、クルド人武装組織 P K K および

トルコ国軍についての記事は特に多かったので、分類上独立させた。「その他」のカテゴリに入っているコラムは、これまでのトルコの歴史や人物について述べている内容のものであったり、また書評、小説など他の8つのカテゴリーに分類できないものである。

1週間で掲載されたコラムのジャンル別分類表 ※()内は各紙の合計における割合

	選挙	P K K、軍	政治	経済	社会
Cumhuriyet	25(約 24%)	18(約 17%)	25(約 24%)	5(約 4%)	7(約 6%)
Milliyet	27(約 28%)	16(約 16%)	14(約 14%)	7(約 7%)	13(約 13%)
Zaman	13(約 18%)	3(約 4%)	5(約 7%)	13(約 18%)	7(約 10%)
Türkiye	14(約 11%)	7(約 5%)	4(約 3%)	6(約 5%)	21(約 16%)

	国際	文化・芸術	スポーツ	その他	計
Cumhuriyet	4(約 3%)	4(約 3%)	6(約 5%)	10(約 9%)	104 (100%)
Milliyet	5(約 5%)	2(約 2%)	2(約 2%)	12(約 12%)	98 (100%)
Zaman	7(約 9%)	7(約 9%)	8(約 11%)	9(12.5%)	72 (100%)
Türkiye	6(約 5%)	4(約 3%)	13(10%)	55(約 42%)	130 (100%)

合計 404 本

こうして見てみると、各紙ごとにそれぞれ異なった特徴が出ているのがわかる。また、各紙でコラムを書くコラムニストの数も内容も異なってくる。そこで、次節で各紙ごとに上の表からわかる特徴や、コラムニストの数についても触れていきたいと考える。

第3節 各紙別に見たコラムのデータ

(1) Cumhuriyet 紙

まず、左派である Cumhuriyet 紙だが、6月4日から6月10日までの1週間には43名のコラムニストが総数104本のコラムを掲載している。Cumhuriyet 紙に全部で何名のコラムニストが寄稿しているか、正確な数は Cumhuriyet 紙のサイト上には掲載されておらず不明だが、それぞれが週に1本～6本、同じ分野のコラムを書いている。

コラムを見てみると、政治やP K K問題について述べられたコラムが非常に多いことがわかる。Cumhuriyet 紙のインターネット版についているスローガンのような「この国の聡明な人々よ。あなた方に Cumhuriyet 紙はぴったりです」という言葉が象徴的に示しており、コラムを見てみても文章が難しく内容が込み入っていて、主な読者のターゲットとして知識人を想定しているのが見て取れる。

（２）Milliyet 紙

次に中道右派である Milliyet 紙だが、やはり選挙関連、P K Kまたは北イラク関連の記事が多い。

Milliyet 紙も、寄稿しているコラムニストの正確な数は不明なのだが、この１週間では 23 名のコラムニストがコラムを書いていた。Cumhuriyet 紙に比べるとコラムニストの数も少なく、１週間のうち 6 日コラムを書くコラムニストも多い。

（３）Zaman 紙

「インターネット初のトルコ新聞」と名乗る Zaman 紙のインターネット版には、コラムニストの全リストが掲載されており、コラムニストは全部で 53 人、そのうちサンプルとしてとりあげた１週間にコラムを書いていたのは 42 人で、１週間に１度もコラムを書かないコラムニストは 11 人いた。全体的にどのジャンルのコラムもバランスよく掲載されているが、他紙より経済関係のコラムが多い。

（４）Türkiye 紙

最後に Türkiye 紙は、「日刊政治新聞」との言葉がついているが、コラムの内容は実に幅広く、政治や経済など一般的な内容以外のものでは、宗教的な内容を含むもの、コラムニストの独り言のような内容のものから、連載小説や短いストーリーが描かれたものなどがコラムの名のもとに掲載されている。１日に掲載されているコラム数も他の三紙と比べ多く、Türkiye 紙に寄稿しているコラムニストも全部で 98 人と四紙の中では最も多い。この１週間にコラムを書いたコラムニストは 53 人であった。複数のカテゴリーを手がけるコラムニストもいて、コラムに関して言えば、他の 3 紙とは異なる特徴をもつ。

第2章 論調から見る四紙のコラムの傾向

第2章では、この週にあった特徴的な出来事について書かれたコラム四紙の日本語訳を比較しながら、それぞれの新聞における論調、および取り扱い方の違いについて触れていきたいと思う。

ここでは、6月8日にトルコのヤシャル・ビュユクアヌト参謀総長が、インターネットの参謀本部のホームページ上にて、直接国民へテロに対して「集団的反応」を示すよう求めるメッセージを掲載したというニュースについて、四紙に掲載されたコラムを比較しながら、各紙でどのようにこの出来事が扱われているのか、またこれらのコラムによってこのニュースが各紙上でどのような位置づけをされているのかを見ていきたい。

第1節 Cumhuriyet 紙 Hikmet Bila のコラム

まず、6月10日付でCumhuriyet紙に掲載されたHikmet Bilaの「この呼びかけは誰に？」というタイトルのコラム²を見てみよう。

緊張が徐々に高まっている。国境で展開されている数千人の兵士…兵器の標的が定まりつつある。攻撃の訓練が行われている。戦車や、飛行機のモーターが動いている。国民の目が、耳が国境に向けられている。殉死した兵士の葬儀が次々に行われる一方で、人々の目は与党に、政治的な決定に向けられているが、それはまだ存在しない。

軍は政治的権限を欲しているが、それを与える者がいない。

もし政府に政治的意思決定能力があれば、そこに現れて、2つのことをいう。もちろん、文書で。

ひとつには、こう言う：私は政治的決定として越境作戦への許可は与えません。考えに考えて、これは誤りだ、国益にダメージを与えるとの結論にたどり着いた。

あるいはこう言う：トルコ国軍よ、テロの脅威を止め、わが国が直面している攻撃を排除するために、あなたに国境を越えて作戦を行い、目の前に誰が現れよ

² <http://arama.yore.com.tr:8081/sayfa.cgi?w+30+/cumhuriyet/0706/10/w/c0307.html>

うともそれを抹殺し破壊する責任と権利を与える。さあ行こう…

(現在のトルコに) このような政治的意思決定能力は存在するのか？

ない…そして兵士は国民の意向に応えるしかないのである。

第一次世界大戦後アナトリアが占領されていたとき、イスタンブルで、そして国内の多くの場所で人々が道にあふれ、彼らの先頭を知識人たちが主導している集会が行われた。占領を非難し、全世界に正しい主張の声を響かせた。

ムスタファ・ケマルがサムスンに現れて行った初めての指揮は、アナトリアのあらゆるところで国が直面している攻撃に対しての集会が行われること、そして人々を解放の主張へと目を覚めさせることであった。なぜなら、国全体への攻撃が行われようとしていたのだ。国全体への攻撃には、国全体で対抗するしかない。ただ兵士とではない…占領者と協力状態にあるイスタンブル政府とスルタンは、すでにお呼びではなかった。

今日トルコが直面している危険は、当時より小さいということはない。この問題はただのテロ行動ではなく、テロを破城槌のように使う、より大きな、より包括的で、より計画性のある（トルコに対する）破壊工作であると何年も私たちは書いてきた。ついに眠っていたものたちが目を覚まし始めているのを見ている。最近の外国メディア（あるいは、外国メディアを通じて話すトルコ人）の文章や解説に注意を向けてごらん下さい。1度だってトルコが被害を受けているテロ攻撃を非難するただ1行の文でさえ見つけることはできないでしょう。しかし口を合わせるかのように、全てにおいて共通している点が1つある：それはトルコとトルコ軍への憎しみ…1ページ1ページ、1枚1枚に…

参謀総長のテロに対する「集団的反発」の要求は私の同業者の一部をがっかりさせたようだ。「国民は殉死者の葬儀で、十分、(テロへの) 怒りを露わにしているではないか。これ以上われわれは何をすればよいのか？」という意味の言葉を述べている。

こういうことを書く人たちはこの問題をまだ理解していない。一つ：「集団的反発」と葬式での反応は同じものではない。二つ：この呼びかけは本当は道端にい

る人々へではなく、あなた方のような人々に向けられている。危険が雪崩のように押し寄せているのに、何年も問題をすり替えてきた人たちに。日々刻刻、1行1行、(こうした間違いの) サンプルを人々に示さないでほしい。

このコラムで Hikmet Bila は、次の2点を主張している。そのひとつは、中央政府、つまり現在の公正発展党 (AKP) 政権に政治的決定能力がないということである。第2には、現在の危機を乗り切るためには、参謀本部が求めているような、国民の「集団的反発」が必要であること、そして、それを阻害しているのが、この発表の意味がわからない「知識人」たちにある、ということである。すなわち、彼は、この発表には肯定的に反応していることがわかる。

第2節 Milliyet 紙 Fikret Bila と Güneri Cıvaoğlu のコラム

次に、6月9日Milliyet紙に掲載されたFikret Bilaによる「参謀本部の『集団的反発』という呼びかけ」というタイトルのコラム³を引用する。

参謀本部は、インターネットサイトに掲載した発表で、テロ事件に対してトルコ国民に「集団的反発」を示すよう求めた。これは、まず、初めてのことである。トルコ国軍は、初めて直接国民に呼びかけを行い、集団での反発を求めている。こういう理由でこの呼びかけは、「新たな状況」であり、「新たな段階」とみなすことができる。トルコ国軍が初めて行ったこの発表の興味深い面は次のように並べることができる。

メッセージの特徴

1. トルコ国軍が近年行ったインターネットでの発表の時間が注意を引いている。参謀本部は、大統領選挙に関連して行った発表を23時20分にサイトに掲載した。テロに対して集団での反発を求めた発表も0時15分にインターネットのサイト上にあった。参謀本部が非常に重要な件におけるこの発表を夜中に行ったことは

³ <http://www.milliyet.com.tr/2007/06/09/yazar/bila.html>

興味深い。

2. 参謀本部は、テロのような命にかかわる重要な件について直接国民の意向を探った。国民へ話しかけた。政治的権限をもつものではなく、社会全体の意志をさぐった。政府はこの理由を考える必要がある。

3. この呼びかけが直接国民に行われたことは、テロとの争いの手段、特に北イラク政策の面で政府とトルコ国軍の間が完全に調和はしていないということを示している。

4. 政府がトルコ大国民議会から越境作戦のための権限を得ておらず、またこの件をトルコ国軍が文書での要求を行っていないせいにしたこと；これに対し、参謀総長ヤシャル・ビュユクアヌトが「先に政府が政治的目的を明らかにすること、また指示を与える必要がある」ことを強調したことは、見解の違いを示している。

5. 参謀本部への権限付与の手続きと権限行使の手続は別問題だとし、できるかぎりのりくらしとした態度をとろうとする考えに政府が断固とした態度を示そうとしないことが、軍が、国民へ直接呼びかけようとするに至った原因かもしれない。

6. トルコ国軍の「集団的反発」の要求は、政府に対して国をあげての圧力をつくりだそうとした性格の呼びかけと見られることができる。

7. テロとの戦いにおける集団での市民の反発の要求は南東部でテロに直面している国民の支援を得ようという目的を含んでいると言える。

8. 呼びかけの向けられた先の一つ、アメリカを始めとする世界の世論だといえるだろう。アメリカが、トルコのテロとの戦いの要求にじらすような返答をし、また期待される支援を行ってこなかったというのが現実である。アメリカがテロとの戦いにおいてダブルスタンダードを適用しているのは誰もが求めている。この状況において国民が示すであろう集団での反応は、アメリカや世界の世論に対し重要な圧力を構成しうる。トルコのテロ（との戦い）の件における正当な期待を世界に訴えるチャンスとなる。

共和国集会

トルコで市民社会団体が先導する数百万人が参加する「共和国集会」が催された。国民はいかなる過激な行動をとらずにこの巨大な集会を実現させた。この集

団的な反応は、政治にかなりの方向付けを行い、影響を与えていた。中道左派や中道右派においての団結や協力という結果に道を開いた。

この例から考えると、テロに対しても国民が市民的反発をすることは内外の決定のメカニズムに対し有効となりうる。

しかし、この反発のコントロールとそれが行き過ぎないようにすることは、非常に重要である。集団心理には注意を払われなければならない。

殉死者の葬儀では、自然と集団的示威行為へ、「反発」へとすでに変化している状態である。

このようにセンシティブな環境でテロに対し示されるであろう「集団的反発」が無軌道なものにならないようにする必要がある。挑発のリスクが考えられなければならない。

このコラムで Fikret Bila は、参謀本部が「直接」国民への呼びかけを行ったことについて、トルコ国軍と AKP 政権の間で生じている意見の食い違い、不調和に原因を求め、またトルコ国内で国民が示す集団的反応は、世界の関心をトルコやトルコが直面しているテロに向ける機会となるということに触れている。そして国民が行う集団的反応が政治に影響を与え、「集団」という言葉に注意を引いている。全体として、事情通によるニュース解説の趣があり、こうしたコラムにより、事件の裏事情を知ることができることを示している。

もうひとつ、同じ6月9日にMilliyet紙に掲載されたGüneri Cıvaogluの「参謀総長の呼びかけ」というタイトルのコラム⁴は以下のとおりである。

参謀本部の「テロに対する国民の反発」という呼びかけの後、ADD（アタチュルク主義者思想協会）会長シェネル・エルイグル将軍と話した。これで2度目の会話である。

1度目は「タンドアンで、チャアラヤンで、イズミルで、マニサで、チャナッカレで、そしてサムスンでのように、何百万もの人々が参加するだろう集会によ

⁴ <http://www.milliyet.com.tr/2007/06/09/yazar/civaoglu.html>

りテロに対し・集団での行動・という試みを私たちは議論するつもりだ」と述べた。エルイグル将軍は、この考えを気に入っていたがことは非常にデリケートであるため違う問題が生じてくる心配があった。

たとえば…この集会は、“人種主義者/排他主義者”のデモや挑発、混乱と化してはいけない。

私は思う…それを防ぐ方法を計画したのだ。

他の市民社会団体と統合して「テロに反対する集会」のためにADDはゴーサインをだしている。参謀本部の発表もこの行動を前提としている。最も重要なこと…「集会が全ての社会を代表している」必要があるということだ。どんな政党や思想も排除されてはいけない。実際、選挙があるので政党と関係をもってはならないが、しかしどの政党や派閥にいる人々へも呼びかけは行われるだろう。さらに…全ての民族が受け入れられるだろう。何百万人もの人々が川の急流のように流れながら、テロに襲いかからなくてはならない。暴力が、「人間の恥」であることが強調されなければいけない。「武器を持たない軍隊」もテロとの戦いでは「武器を持った軍隊」同様に重要な機能を持っている。

人の渦はテロをおぼれさせる

テロとの戦いにおいて最も大きい力は「武器を持たない軍隊」である。例をあげる…2004年3月11日マドリッドで3つの電車が駅で突然爆発した。190人が亡くなった。1000人以上がけがをした。2日後首都マドリッドとスペイン全土で1100万人のスペイン人が、広場に急流のように流れていきながらテロを呪った。すばらしい「集団での民主主義行為」であった。行進には何人かのヨーロッパの首脳たちも参加した。全て、人間の権利の中で最も神聖な「生存権」のために肩をくんだ。数百万人が、テロの上をローラーのように通りぬけた。このような皆が参加する反対行動が行われると、テロは単なる恥ずべきものとなる。テロ行動はすでに「武力によるプロパガンダの機能」を失う。何百万人ものトルコ国民も「集団での考えや感情」を反映した、このような民主主義的な集団的反発を行わなければならないのである。

.....

以上の文章（「人の渦はテロをおぼれさせる」）は、この欄で 2007 年 3 月 24 日に掲載されたものだ。昨晚、参謀本部のインターネットのサイトに「テロに対するトルコ国民の反発を」という呼びかけがなされた。

この呼びかけに心から賛同する。

ここで Güneri Cıvaoglu は、民主主義的な集会あるいは国民の集団的反発が、軍の攻撃同様非常に大切なものだとして述べており、マドリッドでの事件を例に挙げながら、国民が一体となって反対することの重要性を訴えている。そして「国民の集団的反発」を呼びかけた参謀本部に賛成の考えを表している。同時にこの発表を参謀本部が行う以前に自分が現在のこの状況を予見できていたことを示し、自分の考えに自信を持っていることもうかがわせている。また、冒頭のシェネル・エルイグル将軍との会話の引用などは、Fikret Bila のコラムと同じく、コラムがもつ、事件の舞台裏を紹介する性格を示している。

第 3 節 Zaman 紙 A. Turan Alkan と Mümtaz'er Türköne のコラム

次に、6 月 9 日付で掲載された Zaman 紙の A. Turan Alkan による、「親愛なるビュククアスト将軍へ、市民からの公開書簡」というコラム⁵を見てみよう。

親愛なるビュククアスト将軍へ

最近、あなた方の組織のインターネットのサイト上に掲載される発表は、新たに公開された映画同様、興奮とともに迎えられ、解説され、トルコの国民の安寧に影響を与えています。その中でも 6 月 8 日付けで参謀本部が行った発表は注意深く読みました。

要約すると、次のことをおっしゃっています。テロは 5 月にエスカレートし、このため、平和、自由そして民主主義のような高度な人間の価値を悪用する人や組織の本当の顔を見る必要があり、これら（の人や組織）が国民国家モデルを時代遅れのもののように見るという屈折した考えの中にいることを述べ、テロがこの思想に源を持っているとし、しかし軍はこの種の攻撃に必要な答えを与えるで

⁵ <http://www.zaman.com.tr/yazar.do?yazino=549396>

あろうと述べています。そして、あなたはいいます。「トルコ国軍が期待していることは、この種のテロ事件に対し、偉大なるトルコ国民が集団的に反発する反応を示すことである」

あなたのメッセージをたぶん、正確に要約したと思います。そして、平凡な一市民として、私の考えをお聞きいただきたいと思います。

親愛なるビュクアスト将軍、最後の文を読みますと、あなたは国民が「集団的反発」を示す必要があることを述べておられます。この願いが、町にでてテロに対する集会を行うということであるなら、私たちはこれを行います。テロを終わらせるためには過去 25 年耐えてきたことを考えれば、集会に行くことなんかなんでもありません。

何年も子供たちを「まず神のご加護に、その後に司令官に任せ」て兵士に送っているのです。南東部での任務に就かされないようにするため賄賂や策略でだましている者たち、コネを使おうとするものたちを批判し、このようなことを考えるような連中を家から出さないようにしています。軍に尊敬と愛を感じています。なぜなら私たちは知っています、軍を風刺するような国民には、尊厳と実直さがない、と。

その一方で、「われわれの税金はどこへ行っているのか」と口をあぐりあけたりもしません。集会というのであれば我々はそれを行い、しかるべき人たちに手紙を送り、署名をしろというならそこにも行きましょう。もし集団的反発という言葉で他の民主主義的行為をご所望なのであればそれだって、はい、喜んでやります、といいましょう。なぜならわれわれはテロを武力で防ぐのは、軍の仕事だと思うからです。もしそれを市民が行おうとすれば、互いにぶつかり合います。それは軍が行うでしょう、国家の安全を武器で守ることは軍の最も基本の任務ですから。

25 年間テロが終わるよう期待してきました。しかし終わっていません。「なぜ終わらないのだ！必要なことはみんなやったではないか。なぜ私たちの子供を殺した殺人者をペンチでつかみ法廷にひきだすことができないのか。これは誰のせいだ、誰の怠慢なのか！」などとは申しません。わからないからではなく親愛なるビュクアスト将軍、国に敬意を払えばこそ、黙っているのです。お褒めくだ

さい。25年は決して短い時間ではありません。

あなたは最近立て続けに新聞に発言し、北イラクへの侵攻に関し推測を行い、政府に政治決定をするよう求めています。

これらは高度な仕事であり、我々に理解できることではありません。しかしわれわれの国の国境の内側に一向に一掃できない地雷の罠を仕掛けた者たちが、日ごとイラクから来て急いで再びそこにこっそり戻ってはいないことぐらいは、推測できます。

まず第一に、一山の石の道をアスファルトにするという提案をカウントしないのであれば―その地雷の問題の全面的な解決が必要ではありませんか？

もしも適当なお供をつけてくださるなら、北イラクといわず、ペルシャ湾にまでだっていきますよ。しかし、その前に、国境内の山賊を一掃ください。手に武器をとり、山にこもったことを後悔させ、その後、こちらに振り返って、「国境の内側の秩序は万全です、親愛なる国民の皆さん」と、報告いただくことを待っています。

しかし、ご存知のように、こうしたことは、夜中にインターネットのサイトで発表をしたら、パーティーで立ったままで所見を述べるように簡単ではありません。あなたが、軍を政治から遠ざける潔癖さをお持ちで、共和国と体制の番人として祖国の市民の子供たちの才能を信頼し、私たちの生活を脅かす者たちが生まれてきたことを後悔するようにさせていただきたいと思います。この場をかりて、私たちが自分に課せられた努めを十分に果たすことを信頼させていただきたいと願います。敬具。

ここで筆者は、「親愛なるビュクアヌト将軍」などと呼びかけてはいるが、実際のところは参謀総長であるビュクアヌトを皮肉っているのが読み取れる。自分たち市民は必要といわれたことをやってきたし、25年間終わらないテロにも耐えてきた、なのにテロが終わらないのは、そして自分の子供たちが失われてしまうのはどうしてなのか、この原因は軍にあると考えながらも、尊敬と愛を感じている軍にそんなことを言えるわけがないと、筆者は述べている。このコラムを通じて、「集団的反発」を行うよう国民に要求する前に、自分たち（軍）がやるべき仕事をやってほしいということを筆者は述べているのではない

だろうか。

続いてもう一つ、6月9日にZaman紙に掲載されたMümtaz'er Türköneによる「集団的反発の反応」というコラム⁶は以下のとおりである。

参謀本部が6月8日付で発表した発表の最後に、上にあげた文（＝集団的反発の反応）が掲載されている。トルコ国軍は、トルコ国民としてわれわれにテロに対する「集団的に反発の反応を示すこと」を期待していることを明らかにしている。

（軍の）発表の素材となり、全ての世論に発表され、トルコ国軍の名の下に求められたところを見ると、われわれに期待されていることは重要なことなのだろう。しかしそれは何だ？「集団的な反発の反応」という言葉からわれわれは何を理解しなければならないのか？この質問に躊躇せず答える者がいなければならない。トルコ国軍は、われわれに何をしてほしいといっているのか？私たちは、私たちから望まれている、そして発表で言われたところみるととても重要な、この反応をどうやって示すのだろうか？

まず、われわれに求められている反応は、「個人的」なものではなく、「集団的」なものらしい。おそらく、このために私たちはどこかに集まって、組織化されることが求められている。集団的に、「反発する」という言葉から意味されているところは、受身の懇願ではありえない。手に武器をもって町にでることは法に反する。「集団的に反対する」ことは、なにか他の「集団」に対して行うことなのか？いったい、私たちに求められているのは何だ？家を焼き討ちにしたり、リンチをしたりすることは望まれていないだろうから、私たちの「集団的に反対する反応」を、どうやって表現すればいいのか？「テロ問題に対し、集団的に反対する反応」はどうやって示されるのか？集会をすること、デモや行進をする権利を行使すること、犠牲者の葬儀で抗議の叫び声をあげることは、「集団的に反対」には軽すぎないか？いったい、何なのだ、私たちに求められているのは。これほど多くの問いを問わざるをえないこの曖昧さの理由は何だ？もし私たちに何かやってほしい

⁶ <http://www.zaman.com.tr/yazar.do?yazino=549398>

ことがあるなら、特にそれが大事なことから、その希望はどうしてもっとはっきりと表現されないのだ？

問題は単に「集団的に反対する反応」が何なのかということにはとどまらない。巨大なトルコ国軍の 183 単語からなるこの発表文に、どうしてこれほどたくさんのトルコ語の間違いと、この間違いに起因する不明確さが存在するのか？「大衆に向けて、敬意をもって、発表された」この文章は、どうして、大衆には理解できないような書き方で書かれたのか？

7 項目からなる記者発表文の第一項目には、2 つの文がある。1 文目にある「説明 açıklama」の語は、2 文目になると「説明 açıklamalar」になっている。一文目の、「açık bir şekilde açıklama」という表現は、「mefhum-ı muhalifin」の言い方を思い起こさせる。第 3 項目では、「bu olayların」という表現がどうして文のなかに表れてくるのかわからない。第 4 項目には、「Türkiye Cumhuriyeti, ulusal ve üniter yapısının, çağ dışı bir yapı olduğunu düşünen bir yaklaşım ile karşı karşıyadır. Ulusumuzun bu tehlikeli yaklaşımı fark etmek zorunluluğu vardır ve olmalıdır.」とある。最後にある、「vardır ve olmalıdır」という表現が、意味のない強調であることをのぞけば、記者発表文のなかの、一番平易な文章はこれだ。しかしこの文にも、意味と内容の点で問題がある。「Düşünen」ではなく、「savunan bir yaklaşım」でなくてはならない。「Türkiye Cumhuriyeti」が文章の主語なら、「ulusal ve üniter yapı」が、文中で浮いてしまう。いいたいことが、「küreselleşme ile birlikte, ulus devletlerin ortadan kalkacağı」という考えなのであれば、その主張は世界中で議論されている。こうした考え方を理解することは、世界中で続いている議論を理解すること、すなわち、無知でないことを意味する。だとすると、危険は「yaklaşım」ではなく、集権的国民国家 üniter-ulus-devlet 的構造を脅かす、すべての潮流ということになる。客観的に、集権的国民国家的構造を継続させるもっとも大きな力は、民主主義である。集権的国民国家的構造に対する、民族主義的分離主義の危険は、現在においては、ただ、民主主義的代表制度と調和によってのみ乗り越えられる。とすれば、民主主義を踏みにじる、あらゆる「yaklaşım」は、わが国の集権的国民国家的構造に対し、最も大きな危険となる。

第 5 項はトルコ語の文法に完全に反した、めちゃくちゃな文章だ。「Ortaya

çıkan ve giderek artan terör eylemleri, bu tür düşüncelerin ve bunları dolayı
 veya doğrudan destekleyenlerin çarpık düşüncelerinin çok açık bir göstergesi
 olduğu şüphesizdir。」もしも、最近のテロ攻撃と、前述の「yaklaşım」の間に
 関係があるといいたいなら、文は次のようであってはいないだろう。「Giderek
 tırmanan terör eylemlerinin, yukarıdaki yaklaşımların veya bu
 yaklaşımlardan beslenen çarpık düşüncelerin açık bir göstergesi olduğuna
 şüphe yoktur。」また、第6項の「tartışılmaz bir gerçektir」という表現は、トル
 コ国軍のテロに対する決意を強調するにはほど遠く、目的にあわない表現である。

参謀本部の記者発表文を読んだ後で私の出した結論は、次のとおりだ。すなわ
 ち、トルコには、テロよりずっと、テロとの戦いよりずっと大きな問題がある。
 トルコ国軍は、どんな内容だろうと、読んだ人全員が同じことを理解するような、
 美しく豊かな私たちの言語、すなわちトルコ語が適切に用いられた1枚分の文章
 を書けないのか？

もちろん、「集団的に反対する反応」という表現は、それがもたらすだろう危険
 を考えたら、「Türkçe zaafı olarak göz ardı (トルコ語がひどいから無視)」など
 と言ってはいられないほど、深刻な問題である。参謀本部は、この表現で何を言
 いたかったのか、憲法の許す範囲を考え、明晰明確に表明すべきである。

ここで Türköne は、「集団的な反発の反応」という言葉についてあらゆる疑問を投げか
 けながら、この言葉が示すそもそもの意味、またこの中で参謀総長が意図していることが
 何であるのかがわからないと述べ、また参謀総長が発表した文章を引用し文法の面でも意
 味の面でも間違いを指摘しながら、参謀本部を全面的に批判している。

第4節 Türkiye 紙 Nuri Elibol のコラム

最後に、6月10日にTürkiye紙に掲載されたNuri Elibolのコラム⁷を見る。

⁷ <http://www.turkiyegazetesi.com.tr/makaledetay.aspx?ID=333386>

参謀本部が 2007 年 6 月 8 日付でインターネットのサイト上にある発表を掲載した。発表では、「分離主義者や人種主義者のテロがエスカレートしていること、一部の人々や組織が平和、自由のような人間の高い価値をテロ組織の隠れ蓑として用いていること；トルコ国軍がテロとの戦いについてゆるぎない決意を持っていることが強調された。最後の項目では、「トルコ国軍の期待は、この種のテロ事件に対し、偉大なトルコ国民が集団的に反発の反応を示すこと」であると述べられている。

この発表の後、多くの私の仲間の新聞記者や周囲の人々が次のような多くの質問をすることになった。すなわち、「最後の文にある『期待』というのは理解できなかった。集団的な反発の反応とはどういう意味なのか？この反応はどのように示されるのか？このような反応は国内の平和を破壊するものではないのか？人々を分裂させ、互いに争う結果を生まないだろうか？国民の大半が分離主義のテロへ支援しているとでもいうのだろうか、だから国民にこのような反応を求めているのか？トルコ国民は「集団で」何ができるのか？殉死者の葬儀に 1 万人、10 万人が加わってすでに、反応を示している。それ以上にわれわれに何が求められているのだろうか？（南東部の）山岳部（の戦線）に行って戦えとでも言うのか？」

この発表における要求は、これら質問のどの一つでもない。国境の内側(=国内)に住む全ての人々が財産と生命の信用を守ることは、軍の本来の職務である。国境と国を外部からの攻撃や脅威に対し守ることがトルコ国軍が存在する理由であり、義務である。軍はこのためにあるのだ。トルコ共和国の建国以来、この義務をトルコ国軍は最もいい形で実行してきたし、今日も実行するであろうことについて誰も疑いをもっていない。

トルコ国軍はこの発表で決してこの基本的な任務を市民に頼もう、などと考えたわけでない。ここで求められた他のことがある。ここでの要求に 100%こたえる最もよいお手本が、ETA（バスク祖国と自由）による流血事件のたびごとに道にあふれる何百万人ものスペイン人の反応である。どのテロの後にもスペイン人は道にあふれ、ETA への反発を示している。

国民の支援が最も重要

テロとの戦いにおいて国民の支援は 2 つの点から重要である。一つ目；国民が

支援せず、同情もせず、手助けもしないテロ組織には、決して成功や結果を得るチャンスもない。残念ながらわれわれの国では PKK のテロ組織を公然と、あるいは無意識のうちに支援をしている者たちがいる。

二つ目の問題は次の点である；テロとの戦いにおいて任務を果たす人々の仕事は困難であり、毎日死と隣り合わせである。この任務を果たす人々は、士気とモチベーションを支えてくれる心からの支援を必要としている。山も頂も、雪も冬も雨も泥も、夜も昼もなく、自分の命を、ためらいなく捧げるためには、強い愛国心をもち、殉職を信じ、たとえ殉死しても残される家族を国が守ってくれると信頼し、人々が歓喜に満ちた支援をしてくれていることが必要である。さもなければ、戦うことなどできない。思わず、自分は誰のために、何のために（死ぬのか）？その価値はあるのか、と問うてしまうだろう。

参謀本部の発表で求められている支援とは、まさにこの必要に答える、精神的な支援である。戦う人を、ロボットのように見てはいけないのだ。あなたが非難もせず、民主主義なやり方で反発もしない殺人者と彼らは、どんな気持ちで戦うことができようか。あの山の中で兵士たちは、ボスフォラス海峡をながめながら楽しんでいる人たちさえもが、自分たちの後ろにはいると感じていたいのだ。

この呼びかけは、特定の政治的な考えをもった政党や組織、あるいは人々にではなく、国民全てに向けて行われた。しかし、トルコ国軍のこの呼びかけは、選挙前という時期もあり、一部の政党や、政党の関連組織のような機能を果たしている一部の市民団体によって、政治的に利用されるだろう。トルコ国軍はそれをわかっていてやったのだ。

（最近の）共和国集会は、一部の政党や組織の示威大会のようにになっているように、テロを非難する集会も、同じ連中によって利用されるに違いないからだ。私の考えでは、これは、殉死者を傷つける最大の侮辱である。

労働党の態度に注目を

共和国集会では、共和国的価値観擁護問題の微妙なところ（＝反イスラム主義、反 AKP）を、民主的なやり方で示すために、会場に集まった人々は上手に利用されたが、テロ糾弾集会でも、同じことが行われることは明らかだ。

殉死者の棺を使って票を集めようとする連中は、決して許されてはならない。

選挙後に、AKP を政権につかせたくない人たちは、参謀本部が要望した「社会が集团的に反発する反応」を、反 AKP デモにすりかえるため、思いつく限りの手を使って来るだろう。それはもう明らかだ。しかし、子供たちを、祖国のために殉死させた母や父たちは、こんな利用のされ方を望むだろうか？

労働党が6月8日に同党のインターネットサイトにのせた、「さあ、反発を！さあ、ディヤルバクルへ İşte refleks! Haydi Diyarbakır'a」という発表は興味深いものだった。参謀本部は、昨日行った発表によりこのサイトで行われた呼びかけと関係しているかのように見られることに不快に思い、「サイトに掲載された分析は、事実を反映していない。トルコ国軍はいかなる政党とも関係がなく、また、トルコ国軍が国民全体に行った呼びかけを、一部の集団が勝手に利用することはあってはならない。呼びかけで意図されていたのは、社会的反発が暴力的にではなく、民主的な規則に則って示されることである」という発表を行うことになった。

トルコ国軍が、この国のために喜んで命を捧げた若者たち (vatan evlatları) の葬儀が政治家たちによって利用されないよう、テロ糾弾集会が一部の政党や集団のショーの舞台、集票活動の場にならないよう、もう一度、発表をすることが必要だろう。なんと嘆かわしいことだろうか、アタチュルクを、共和国的価値 (= 世俗主義) を、国旗を、宗教を、全て政治の道具に使っている。殉死者の葬儀が集票の場に化したことは、惨状のひどさを示している。

ここでは、反 AKP、反イスラム主義の政党や組織が、殉死した兵士たちの葬儀を自分たちの集票活動に利用するのではないかと、これらの政党や組織を真っ向から否定し、軍寄りの見方を見せている。そして参謀本部が発表した「トルコ国民への期待」に対し、これに応えるよう読者に「集团的な反発」を示すようお願い、また自分たちのために任務を行っている軍を国民は支援する必要があるのではないかと述べている。

第5節 四紙の比較

サンプルとして取り上げた1週間の中でこの出来事について触れているコラムは Cumhuriyet 紙が1本、Milliyet 紙が3本、ZAMAN 紙が2本、Türkiye 紙が1本と、全

体的に見ても決して多くはないが、各紙・各コラムニストの扱い方の違いがよくわかる出来事である。

対象とした「軍の国民への呼びかけ」は、イラク戦線での展開に関する軍と AKP 政権の対立を背景としているため、第一に AKP 政権への支持・不支持、第二に軍の PKK 一掃作戦への支持・不支持、という 2 重の基準のなかで、コラムニストの判断が現れている。

四紙を比較してみると、中道右派の **Milliyet** 紙では、**Fikret Bila** は軍と政府のどちら側寄りの意見を持っているのかということは明確にはしていないが、「テロに対しても国民が市民的反発をすることは内外の決定のメカニズムに対し有効となりうる」という文からも、軍の呼びかけに対しプラスの見方を持っていると読み取ることができる。また **Güneri Cıvaoglu** はエルイグル将軍との会話を引用しながら「軍の国民への呼びかけ」に賛成しており、2 人とも「呼びかけ」それ自体には基本的に賛成しているものの、2 人のコラムはこの出来事について解説を行っているという性格が強く、**Milliyet** 紙の特徴を表したものとなっている。

イスラム系右派の **Zaman** 紙では、軍を皮肉ったり、参謀総長の発表の文から引用して文法的・意味的に細かい部分まで指摘するなど、他紙とは違った角度からこの出来事をとらえている。またその内容からこれらのコラムは知識のあるインテリ層に向けて書かれたもののように考えることができる。

Türkiye 紙は全面的に参謀本部および軍を支援する意見を述べており、民族主義系右派らしい主張の文章であり、**Zaman** 紙とは対照的な内容となっている。

そして左派紙である **Cumhuriyet** 紙では **Hikmet Bila** が、現在の AKP 政権を否定しながら、軍の求める反テロ、反 PKK への市民的盛り上がりが必要であることを主張している。

第3章 トルコの新聞におけるコラム・コラムニスト

第1節 トルコのコラムニスト

本稿で私がサンプルとして取り上げた1週間の中でコラムを書いていたコラムニストは、Cumhuriyet 紙で計 43 人、Milliyet 紙で 13 人、Zaman 紙で 42 人、Türkiye 紙で 53 人であった。ここでは、サンプルで用いたコラムを書いた Fikret Bila について見ていきたい。

Milliyet 紙にコラムを書く Fikret Bila は、Milliyet 紙のアンカラ代表。新聞記者でありコラムニストである。軍に近いことで知られている。また 2 月 28 日経過において「軍のメッセージを支持した新聞記者」として知られる。国家主義的な経済と外交を主張し、新聞ではシステマテシクなコラムを発表している。エジェビットの家族と近いことで知られているが、エジェビットの政治的行動には賛同していない。また Cumhuriyet 紙のコラムニスト Hikmet Bila は彼の兄である。

トルコのコラムニストは他にもさまざまな経歴をもっている人々がいて、彼らにより、トルコの新聞にはさまざまな意見や思想が述べられたコラムが日々掲載されているのである。

第2節 コラムの持つ特徴

コラムは、各新聞社やその新聞の読者の傾向に合わせた意見を展開し、その新聞の性格をわかりやすく表す重要な要素である。また単にコラムニストの意見を述べるだけでなく、ニュース解説あるいはニュースの裏を読むという一面も持ち合わせている。

そして、今回サンプルとして扱ったコラムにもあったように、例えば Cumhuriyet 紙の美しい文章や、Zaman 紙の手紙形式のコラムなど、読者がコラムニストの意見だけでなく、コラムの文章全体を楽しめるようなものが掲載されていることもトルコにおけるコラムの特徴の一つである。

また、今回特に Türkiye 紙や Cumhuriyet 紙で目立った点であったのがそのコラムの多さである。Türkiye 紙は Zaman 紙の 2 倍弱ものコラムが掲載されていたが、これは、

Türkiye 紙や Cumhuriyet 紙のような発行部数が少なく、取材力のない新聞の記事の不足分を埋める役割を果たしているのではないだろうか。現に Türkiye 紙には連載小説やコラムニストの独り言のようなものといった、他紙とは異なる種類のコラムまでもが掲載されている点を考えてみると、これもトルコの新聞のコラムにおける特徴と言えるのではないだろうか。

おわりに

今回、トルコの新聞四紙をコラムというテーマにしぼって、データ、内容の点から比較してきたが、こうして見てみると一口にコラムといっても各紙さまざまであり、各紙の持つ特徴がよくわかった。またコラムというのはその新聞の意見や傾向を代弁し、性格づけを行う重要な役割を担っていることが明らかになった。特にトルコの新聞においては、日本の新聞よりもその新聞の傾向が如実に現れているようなコラムが掲載されていることが見て取れるのではないのだろうか。そして、トルコのコラムニストは想像以上に多く、彼らによりトルコの新聞には多様な意見が示されていることもわかった。

これからもトルコの新聞のコラム、およびコラムニストに注目していきたいと思う。

参考サイト一覧

Cumhuriyet 紙

<http://www.cumhuriyet.com.tr/>

Milliyet 紙

<http://www.milliyet.com.tr/>

Zaman 紙

<http://www.zaman.com.tr/>

Türkiye 紙

<http://turkiyegazatesi.com.tr/>

wikipedi

<http://tr.wikipedia.org/wiki/>